
フォーマルハウト

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フォーマルハウト

【Zコード】

Z9604F

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

戦争の影が見え隠れする外側の世界。両親のいないキオトとワタルが一人で生きる内側の世界。つましくも穏やかな生活を続ける二人の成長の物語。

一人の生活

戦争がはじまつた。

この国も、もう安全とは言えないかも知れない。

前線に行つた父さんは帰つてこないし、青い目をした吟遊詩人が母さんを連れ去つてしまつてから、僕たちは一人だけになつてしまつた。

大量の魚の缶詰が地下室に保管してあるが、三ヶ月もすれば底を尽きるだろう

漁師だつた父親の船と、おんぼろだけど頑丈なこの家。

それが僕らに残された全てだった。

僕らの小さな村から、港のある大きな町までは歩いて三時間かかる。

ワタルは親方の船の荷物運びをして、一日1000円の生活費と魚の骨やいらない部分を貰つてくる。

僕は、食料の増産の為に去年から作った家庭菜園の管理をする。

今は、ジャガイモと白菜を植えている。

種や肥料を買うお金が無いので、本当にこなたやかな代物だけど、どういう訳か植物はよく育つ。

僕の家庭菜園に限らず、このあたりの畠はみんなそうで、いい土とおひさまに恵まれていると言える。

町の方に行くと潮風の被害や土の状態が悪いので、種を植えても育たない。

そして、僕のもう一つの仕事は、家を守ることだ。

毎日、掃除と炊事をし、ときどき洗濯をする。戸締りや食糧の管理も立派な仕事だ。

父親の船は青いカバーに包まれて倉庫に眠っている。

修理しなければ乗れないくらいに老朽化していて、父親が前線に行つてからは特に酷い。

「いつか、この船を直して、俺は漁師になりたい」

夕食の時にワタルが言った。

「今は戦争中だけど、きっとなるよ」

「親方は、駄目だつていうけど、俺はなる

「そうだね」

最近、ワタルの身長が急に伸びて、腕や脚にも筋肉がついてきた。僕はチビのままだけど、足の速さだけは自信があった。

「キオトはそのままいいよ。俺みたいになつたら嫌だ」

「二人で働いたらもつと楽ができるのに……」

「家を守るのがお前の仕事だろ?」

「うん」

「帰る家があるから、安心して漁ができるんだ」

「父さんがよく言つてたね」

「漁師の間では当然だ。親方も言つてる」

「ふーん」

「それより、気をつけろよ」

「ワタルが突然、真剣そうな顔になる。

「何を?」

「お前は可愛いんだから、留守中に悪い男に引つかかるなよ」

「僕は母さんじやないよ、男だし」

「そうだったな」

最近、ワタルは父さんの服を着ている事が多い。前の服はボロボロで窮屈になつてしまつたし、新しい服を買つお金はない。だから僕は、母さんの服を着ている。

母さんが派手な服を着るようになつたのは、あの詩人が家に居着くようになつてからだつたから、僕は地味な服から順番に着ている。「キオトはスカートがよく似合う。それに美人だ」

「からかわないでよ、ただでさえ村の人から変な眼で見られているのに、ワタルまで」

「でも、冗談抜きでさ……そんなに怒るなよ」

怒ってるんじゃないなくて恥ずかしかっただけだけど、僕は怒ったふりを続けた。

「父さんが帰る家は、僕が守るよ、そういうこと本当だ」

「前言撤回、お前はやっぱ男らしこよ」

「ありがとう」

ランプを節約するために、日が暮れてからは早めに寝る事にしている。

暖房のない部屋で、二人は寄り添つて眠る。

小さかった頃から、ずっとそうしてきました。

だから、ワタルの体が成長する音を、僕はいつも感じている。

父さんの船

まだ、空が暗い「つむぎ」が覚める。

アイツがまだ寝ているのを確認して、ゆっくりと毛布をかけてやる。

この時間には、父さんはもう家を出る準備をしていた。
船の置いてある倉庫で網を繕つて、錆びないように針や金具には油を注していた。

一人用の船でオンボロだつたけれど、立派な船外機がついていたし、借りたものではなくて、父さんが自分で買ったものだつたら、すごく大事にしていた。

俺やキオトが船に乗ることを、絶対に許してくれなかつた。

「こいつはオモチャじゃねえ、おれの命そのものだ」

そういうて、ぶん殴られた記憶がある。

船を見るために、俺はいったん家を出て、裏に回つた。
倉庫に行くのは久しぶりだ。

俺もキオトも昔から船を見るのが好きだつた。

模型の船を造つて、近くの河で一緒に流したりもした。

俺は不器用だつたから、一瞬で沈没する船ばかり造つていた。

キオトの造る船は完璧だつた。形も美しかつたし、性能も良かつた。

村の子供の中では間違いなく一番早かつたので、俺は勝手にキオトの造つた船を盗んでは、近所のやつらに自慢していた。

倉庫に入ると、意外にも掃除が行き届いていて、塵一つ無かつた。
それどころか、船は綺麗に洗つてあり、油まで注してあつた。

「早いね、ワタル」

「おはよう、よく此処だつて分かつたな」

「起きたらどこにも居ないから」

「油も注したのか？」

「うん、たまには手入れ、してやらないとね」
キオトが油まみれになつて、船の掃除をする姿を俺は想像できなかつた。

「あ、スカートは脱いでやつたよ。汚れたら洗濯が大変だから
言つたら手伝つたのに」「
ワタルに任せたら、船の形が変わっちゃうよ。それに仕事で疲れて
いるだろうし」「

「なんだと」

キオトなりの気遣いなのだろうが、なんだか複雑な気分だつた。
「ワタルが気持よく漁ができるように、頑張つたんだよ」

「そんなこと、俺が一人でやるのに」「

「これは僕の仕事、でしょ？」

キオトが「冗談で言つていい訳ではない」とは分かつた。
「とにかく、勝手に船をいじるのはやめる。怪我するぞ」「

「嫌だ」

「え?」

「ワタルがなんと言おうと、僕がやるんだ。 そうじゃないと漁には行かせない」

キオトが俺の意見にこんな風に逆らつことは、滅多にない。
「ワタルが一生、船の心配をしなくていいように、僕がやる」「
それじゃあ、俺が漁師として一生、半人前みたいじゃないか」「
違うよ、僕らは二人で一人前じゃない、二人前だよ」「

「なんか、格好悪い」

キオトの言いたい事は解るけれど、俺はまだ納得できない。

「大丈夫、ワタルは格好いいから」

「そういう問題かよ」

なんだか、キオトの笑顔に誤魔化されている氣もするが。

「それより朝、はんが冷めちゃうよ」

「また、魚と豆のスープだろ」

「そのとおり」

「まいにか

ある提案

父さんが帰つてこないことは、もうなんとなく分かっていた。けれど、それをワタルに言ひ気にはなれなかつた。

町の人の話では、父さんは気がくるつて海に落ちて死んだという。ワタルが近くの海で漁をするようになつて、僕らは一人だけの生活に慣れていた。

最初はほとんど毎日、魚が獲れない日々が続いた。

缶詰も尽きていたので、豆と野菜の切れ端でスープにした。体力が必要なワタルには、できるだけ栄養のあるものを食べさせたかったが、野菜はタダ同然で取引されるので、卵やミルクは高かつた。

ある日、ワタルの留守中に、網元のトウジロウさんがやつてきた。「お前たち兄弟は、よくやつてるよ。最初は野たれ死ぬかと思ったが、ワタルは漁に出れるようにもなつた」

「はい、おかげさまで」

「キオトもいい顔になつた。俺が仕込んだんだからワタルはいい漁師になる」

「はい」

ワタルが褒められると自分の事のようにうれしく思つ。

「だがな、二人で生活するには家計が厳しいんじゃないかな」

「え？」

「今までは子供だったから、大目に見ていた分もある。今すぐには言わないが、きちんと組合に入つて、払うものは払つてもうう」トウジロウさんの表情はいつもと変わらなかつたが、どうやら彼一人の意見というわけではないらしい。おそらく、網元として、こういう仕事をしなければならないのだ。

「わかりました、ワタルと相談して……」

「いや、この話には続きがあるんだ。一人で暮らすには厳しいと思

う。だが、それぞれ分かれて暮らしてみないか？」

「ワタルと僕が分かれて暮らすということですか？」

「まあ、そういうことだ。ワタルは俺のところで働かせ、お前は別
の家に預ける」

「そんな、僕たちはずっと一人で暮らしてきた。それにこの家だつ
て……」

「周りが支えてきたから、ここまでこれたんだ。違うか？」

「はい、そうです。でも……」

「親父さんは戻つてこない。これは確かな情報だ」

「もういいです。帰つてください」

トウジロウさんは、少しだびしそうな顔をした後、真剣な顔で言
つた。

「また来る。この話はワタルにはしない。お前はよく考えておけ」

「分かりました」

父さんの家を見捨てるなんてあり得ない。けれど一人では生活で
きない。

一番いい方法はなんだろう。

そんなことを考えていると、鐘の音で、ワタルが港に帰港したこ
とが分かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9604f/>

フォーマルハウト

2010年10月10日16時38分発行